



新春企画

大分から東京、大分から世界へ。

東京2020オリンピック・パラリンピックに向けて

高橋尚子さんと語る

2020年東京オリンピック・パラリンピックに向け、スポーツ振興や施設整備、海外からの観光客誘致、キャンプ誘致など、全国でさまざまな取り組みが行われています。今回は、2000年シドニーオリンピック女子マラソンの金メダリスト 高橋尚子さんをゲストにお迎えし、東京オリンピック・パラリンピックを契機とした共生社会の実現やスポーツがもたらすレガシー（遺産）などについて語っていただきました。

コーディネーター 財前真由美（フリーアナウンサー）



都市センターホテル（東京都千代田区）

「スポーツ・オブ・ハート in 大分」を振り返って

——高橋さんは、9月に大分市で開催された、障がいがある人もない人も、一緒に楽しむことができるスポーツと文化のイベント「スポーツ・オブ・ハート in 大分」に応援団長として参加されましたが、大分の印象についてお聞かせください。

高橋 大分は、車いすマラソン発祥の地であり、障がい者が働き、生活する施設である「太陽の家」もあって、健常者と障がい者の共生社会が出来上がっているまちです。今回、大分に来て驚いたのは、居酒屋のテーブルまで車いすが入って、みんなで一緒に飲むことができる、また、いろいろな場所が障がい者が自由なく生活できているということです。

パラリンピックが東京で開催されるということで、パラリンピアンが今注目されている中で、日頃、東京の銀座で障がい者をどれだけ見るかというところ、見る機会は本当に少ないのが現実です。東京オリンピック・パラリンピックを契機に、スポーツだけではなく、日常の生活から変わらなれないといけない。大分には、障がいのある人も

ない人も楽しく生活できる術があります。これは私たちが目指していかなければいけない姿だと思いますね。

市長 高橋さんやプロ車いすランナーの廣道純さんが、「スポーツ・オブ・ハートをぜひ大分市で開催したい」ということで、前回から代々木と大分市の2か所で行われるようになりました。大分市では9月に、JR大分駅府内中央口広場や中央通り、近隣の小学校を会場に開催されまして、来場者数が約8万7千人と、前回は約7万5千人だったので、参加される方が非常に増えています。



多くの来場者でにぎわったスポーツ・オブ・ハート

得し、2001年のベルリンマラソンでは、女性では初めて2時間20分を切る世界記録を樹立するなど、数々の偉業を成し遂げていますが、ご自身がマラソン競技から得たものについてお聞かせください。

高橋 私がマラソン競技から得たもので、皆さんの記憶に残っているのは「金メダル」だと思います。私は、シドニーオリンピックで金メダルをとって、自分の人生が大きく変わりました。ただ、今振り返ってみて、自分の中で一番の財産は、「人とのつながり」ではないかと思っています。小出義雄監督やスタッフ、仲間、そしてスポーツを通じて知り合った多くの方々。金メダルは、次第に過去の出来事になってしましますが、金メダルを取ったことにつながった人との縁は、これからはずっと私の人生の中で生きていくと思っています。

当時、マラソンの練習では、多量に走って1日80キロを走っていました。そういった意味では非常に強い体も得ました。また、世界記録を目指すことで、自分の可能性を切り開いていけるようになったのもマラソン競技から得たものだと思います。

スポーツがもたらすレガシー（遺産）とは

——高橋さんは、2000年シドニーオリンピックで金メダルを獲得

——高橋さんは、2000年シドニーオリンピックで金メダルを獲得